

### 【代表者研究者】

山室 信一

京都大学 人文科学研究所 教授

### 【研究題目】

近代東アジアにおける思想連鎖と明治法政学の翻訳問題

### 【研究の目的】

近代東アジア世界における国民国家形成とそれに係わる人文・社会科学の受容においては、日本が欧米から逸早く継受した制度と学知が大きな意味をもった。この日本を結節環とした欧米からアジア諸国へと伝播されていった制度や思想の動態を思想連鎖という視角によって捉えていくためには、その担い手となった中国や朝鮮からの留学生や亡命活動家さらには日本から招聘された日本人教師たちの活動を解明する必要がある。その際、特にそこでいかなる講義が行われ、それらがどのようにして各国において受容され、普及していったかが問題となる。しかし、史料的な制約もあってその実態は必ずしも明らかではなかった。そこで日本内外に残る講義録や翻訳書などの史料を発掘し、それらがどのように翻訳され、それに応じていかなる学知の体系化や術語の普及が進んだのか、またそこにどのような日本との相違や偏差が見出されるのかなどを翻訳問題として設定し、その解明を通して近代日本の学問が占めた世界史的意義を闡明していくことに本研究の目的がある。

### 【研究の内容・方法】

本研究の最大の課題と方法は、これまで殆どその所在どころか、発行されたかどうかさえ不明であった講義録や翻訳書をいかにして探し出すかということにあった。そのため、日本のみならず中国や韓国などの大学・公共図書館や文書館などの目録や図書カードなどによって検索するだけでなく、入庫を許された図書館などにおいて未整理の図書や雑誌を直接手に取って調べる現地調査の方法を採った。また、中国・台湾や韓国、アメリカなどに在住する研究者から情報提供を受けることによって、書誌的な展望を図ることとした。

更に国内においては東京都立図書館の実藤文庫や井上哲次郎文庫のほか、各地の旧高等商業学校から移管されたアジア関係文書の中にも中文やハングルに訳された日本の法政書があることを現認することができた。なお、東京大学東洋文化研究所の大木文庫には北京の法政学堂における日本人教習の講義録が架蔵されており、これらと教習の著作等との関連についても分析を進めた。こうした調査によって、例えば上海復旦大学書庫から筆者等不明ながら『政治学原理』の手書き講義ノートを発見することができた。ただ、このノートをはじめとして所在を確認しえた講義録や翻訳書などの中には閲覧さえできないものが多く、またたとえ閲覧できたとしても複製を許可されない貴重書扱いの史料が少なくなかったため、時間の関係で筆写未了になってしまったものがある。

ただ、上海図書館で法政大学法政速成科での漢文講義録の複写が可能となったことによって、それを日本での講義録と比較対照するという方法によって、翻訳目的や訳語の異同を明らかにした。さらに、広東の法政学堂で刊行された講義録を中山大学において入手できたことによって、これまた法政大学法政速成科での講義やそこで使用された日本の法政書に依拠したものであったことが判明するなど、翻訳問題について究明していくための条件となる史料的基盤を整えることができた。

#### 【結論・考察】

これまで蒐集しえた史料の分析による限り、東アジア世界においては1930年代まで人文・社会科学の学術用語の殆どは明治日本で鑄造された翻訳語がそのまま使用されており、そのこととの関連で講座や学科・科目などの名称などにも日本の影響が強く現れていた。しかしながら、韓国においては植民地統治に対する反発などもあって、朝鮮社会に特有な法政用語を使おうとする志向も強く、特に独立後は日本語を排斥する運動などもあって、この法政学の翻訳問題が単に学術的な観点からだけでは処理しきれない次元の問題を孕んでいることが明らかになってきた。また、訳語そのものは残ったものの、中国においては社会主義の導入とそれに伴って学知の受容の中心が日本からソ連やフランスへと移ったことによって、語義の変容が生じていると考えられる事例も見出された。

これらのことを含めて、翻訳語使用の異同がいかなる社会的・歴史的条件などによって規定されているのかを明らかにしていくことが、今後の研究課題として浮上してきた。